広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会会議録

平成24年９月７日（金）

広　島　県　教　育　委　員　会

広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会出席者名簿

平成24年９月７日（金）
午後３時から午後５時まで

１　出席委員（50音順）

加　藤　　千　政
川　野　　祐　二
古　賀　　一　博
小　村　　和　年
坂　越　　正　樹
佐々木　　寛
砂　原　　文　男
武　田　　哲　司
寺　西　　玉　実
冨　永　　健　三
中　川　　和　義
長　田　　克　司
前　　眞一郎
三　好　　久美子
毛　利　　葉

２　欠席委員（50音順）

青　木　　暢　之
赤　岡　　功
伊　藤　　敬　之
吉　川　　信　政
牛　来　　千　鶴
西　井　　裕　昭
二　見　　吉　康
山　口　　寛　昭

馬屋原課長代理：　皆さん，こんにちは。定刻となりました。ただいまから広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会第４回を開催します。

委員の皆様方におかれましては，本日の第４回会議の開始時刻の変更に当たりまして，御多用の中，御協力をいただきましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

なお，本日は15名の委員の皆様に御出席をいただいております。青木委員，赤岡委員，伊藤委員，吉川委員，牛来委員，西井委員，二見委員，山口委員，本日は所用のため御欠席でございます。

それでは，坂越会長，よろしくお願いをいたします。

坂 越 会 長：　冒頭に恐縮ですが，私からもおわびを申し上げます。本当にお忙しい委員の皆さん方に１時間の時間調整，直前にお願いするようなことになりまして，申し訳ございません。大学のグローバル人材育成推進という事業の審査会だったんですけれども，広島大学は高大連携でグローバル化をやるとプレゼンテーションをやってきましたので，また，ここらでも関係があるところで紹介させていただければと思います。

では，今日の会議次第，協議会の次第に即しましてお願いをしたいと思いますけれども，初めに，扉の紙の次にスケジュールがございます。本日，第４回になります。４回から６回までのこれからの流れについて，事務局のほうから御説明をお願いします。

永井学校経営課長：　はい。それでは失礼いたします。

お手元に参考として配付をいたしております検討協議のスケジュールを御覧ください。

これまでの３回の会議では，諮問項目の一つでございます「本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方について」といたしまして，具体的には「本県を内外から支える人材，生徒が高等学校で身に付けるべき力，高等学校教育の目指す姿」について，御協議をいただきました。

本日の第４回会議からは，本協議会に諮問されているもう一つの事項である「本県における今後の高等学校の在り方について」をテーマとして協議していただくことになります。

また，第６回会議では「中間まとめ」の検討といたしまして，第１回から第５回までの県全体を見通した本県の国・公・私立高校の在り方に係る「中間まとめ」をいただければと思っております。

説明は以上でございます。

協議１　第１回から第３回会議のまとめ

坂 越 会 長：　はい，ありがとうございます。４回，５回，今日と次回を経て，６回目に前半中間まとめというスケジュールになります。その中間まとめに向けてということにもなるのですけれども，前回，３回の協議会の中で，委員の皆様方からいただいた様々な意見について集約・整理をするようなお願いをしておきました。それにつきまして，資料１になりますが，事務局からの説明をお願いします。

永井学校経営課長：　はい。それでは，資料番号１を御覧ください。第１回から第３回会議まで，「本県を支える人材の育成と今後の高等学校教育の在り方について」御協議をいただき，委員の皆様方から出された主な意見を事務局でまとめ，整理をしたものでございます。

１は，本県を内外から支える人材でございます。

「郷土の文化を知り，品性，経済力を身に付け，広島県から世界に発信できる人材」などの人材像が意見として出されました。

２は，高等学校で身に付けるべき力でございます。

第２回会議で，子どもたちが社会的に自立し，個々の夢を実現するための基礎となる力を涵養する必要がある旨の意見が，各委員から多く出されました。

そして，委員から出されました具体の身に付けるべき力について主なものを，全ての高校生が身に付けるべき力である「基礎となる力（Ａ）」と，個々の状況に応じて社会で活躍できるために身に付けるべき力である「基礎となる力（Ｂ）」に，大きく２つに分類をしております。

３は，「高校教育が目指すべき姿」でございます。

「生徒が高校で身に付けるべき力」を育成するために，高校教育が目指すべき姿について協議をしていただく中で，各委員の皆様から出された主な意見を２つに分けて整理

をいたしております。
まず，「学校教育について」につきましては，「幅広い教養の基礎的な部分を習得させる」ことから，「スポーツや技術などを通じた人間づくりを行う」までの意見がございました。
また，「特色のある学校について」につきましては，「グローバル化に対応した拠点校」の創設について意見が出されております。
説明は以上でございます。

坂越会長：　はい，ありがとうございます。先ほど説明がありましたように，この意見，本当に委員の皆さんからはたくさんの，議事録にもありますような形で御意見をいただいてるんですけれども，今，こういう整理を御確認いただきまして，やっぱり少し漏れてるところはないかとか，それから，ここはもうちょっとこういう正確な表現にというようなことがございましたら，ちょっと時間をとって見ていただきたいと思うのですが。６回目の会議で中間まとめをすることになりますが，その中間まとめの土台になる委員の皆さんの御意見ということになりますので，ちょっとここを確認いただければと思います。
はい，お願いします。

武田委員：　それでは，座ったままで失礼いたします。
「本県を内外から支える人材」のところで，前回の会議で，私が，最後にあります「社会に貢献できる人材」のところを，もう少し狭義の「地域社会に貢献できる人材」とするのはいかがでしょうかという発言をさせていただきました。今回，それが採用されていないようでございますけども，却下なのか，それとも漏れてるのか，どちらなのか，ちょっと確認ができればと思っております。と申しますのが，前回の繰り返しになりますけれども，やはり学校と地域社会というのは，様々な形で連携をしていかなければならないと思ってます。そういった中で，社会貢献をするというのは，これ，もう当たり前のこと，学校教育自体が目指すべきことですので，ここで広島県のことを考えるんであれば，少し狭義の，狭い意味での「地域社会に貢献できる人材」とすべきではないかと思って発言をしたところです。お願いいたします。

坂越会長：　はい。すみません，決して却下ということではないというふうに理解しておりますけれども。もちろん，「地域社会に貢献できる人材」，これをとることに何の問題もないと思うんですけれども，２の「基礎となる力（Ａ）」，ここは少し，一般的な力という意味ですが，３つ目に「社会に貢献しようとする態度」という言葉がございますけど，武田委員さん，ここの一般的に社会に貢献，態度ということに関しては，社会という言葉でよろしいでしょうか。

武田委員：　そうでしょうね。態度であれば，そういうことで結構だと思います。

坂越会長：　ほかの委員の皆さん，まずは１番目の「本県内外」のところなんですが，地域社会という形で対象を限定的にという表現，いかがでしょう。
はい。

小村委員：　私は，そういうふうに小さくする必要はないんじゃないんかと思います。子どもというのは，どこまで伸びるか分からない可能性を持っているわけですね。東京へ出て全国，国のために活躍できる者もいるし，場合によってはニューヨークに行き，国連で働くというような，どういう人材が出るか分からない。そういう意味では，あまり小さくするよりは，社会という言葉の中に地域社会も含んでるというふうに考えて，大らかな方がいいんじゃないかと思います。

坂越会長：　さあ，ちょっと会長としては，まとめにくくなりましたけれども。社会ということの中には，地域社会もあれば，世界という，そういう意味合いも入ってるという，それを私たちの，ここでの合意といいますか，地域社会も含む社会なんですよということを確認したということで，武田委員さん，御理解いただけませんか。ありがとうございます。
はい。

川野委員：　一番最初の「本県を内外から支える人材」の人材像のところで，「郷土の文化を知り，品性，経済力を身に付け」の，この「経済力を身に付け」がちょっと気になったんですね。どこでそう出たかなと思うと，どうも第１回，このまとめを見ると，第２回のとこの資料の「第１回会議における意見」というのがあって，「経済的な活躍ができる力をつけるとともに，郷土の文化，日本の文化がきっちりとわかっている，そして品性のある人間に育ってほしい」と。「経済的な活躍ができる力をつけるとともに」が，「経済力を身に付け」ということとは，ちょっと違うかなと思った。でも，それがずっと，その後もこれ残っちゃってて，何か経済力を身に付けた人間というのは，違和感を感じま

した。

坂 越 会 長： なるほど。いや，決して，その経済力を一方的な目で見るわけじゃないんですが，品性，経済力とつながってるところが，また微妙という感じがしないでもないですよね。どうしますかな。もちろん，真意，本当の意味合いは，経済界でも活躍できるということ。産業界ですよね，経済産業界で活躍できる力ということなんですけれども，この言葉をちょっと工夫させてください。経済力という言葉は，ちょっと考えたいと思います。

ほかにいかがでしょう。これが６回目という，何度も申し上げてますけれども。ですから，また見ていただきまして，次回の会議までに，また御意見ありましたら，メールででもメモででもいいんですけれども，事務局のほうにお寄せいただければ，なるべくそれを反映したような形で整理したいと思いますので，よろしくお願いします。

まず，この場ではこれでよろしいでしょうか。はい，ありがとうございます。

協議２　「今後求められる高等学校」

坂 越 会 長： それでは，本日の協議でございます。

この協議会に諮問していただいている大きな検討事項ですけれども，「本県における今後の高等学校の在り方」ということについての協議に入りたいと思います。

第３回までの，先ほど見ていただいたような人材，力，目指すべき姿，こういったものを前提としながら，それでは広島県において「今後どういう高等学校が必要なのか」ということについての協議ということになります。少し具体的な事例も含めながら，事務局のほうで資料を用意してくださってますので，その説明のほうから入りたいと思います。お願いします。

永井学校経営課長： はい。それでは，資料番号２を御覧ください。

ここには，「今後求められる高等学校」の御協議に当たり，前提となります「本県を内外から支える人材」についての具体的な人材像と，これらの人材を育成するために，高等学校教育が目指すべき姿についての具体的な目標や取組の方向性などを，資料番号１の記載内容に基づき，あげております。資料の下のほうに枠で囲っております「今後求められる高等学校とその教育内容等」につきまして，本日御協議をいただきます内容でございます。

本日の会議におきましては，資料の中ほどに「（学校教育について）」として主な意見をあげておりますが，こうした高等学校教育が目指すべき姿についての具体的な目標や取組の方向性などを踏まえていただき，どのような高等学校が求められるのかということをお示しをいただきたいと考えております。

続きまして，資料番号３を御覧ください。資料番号３以降の資料は，「今後求められる高等学校」について，御意見をいただきます際の参考資料でございます。

まず，資料番号３でございます。

１ページは，高等学校の目的，目標，制度の概要を示した資料でございます。

また，２ページ以降も，配置図の説明の中で少し触れますけれども，全日制，定時制などの課程や学科についての説明の内容をお示ししております。

続きまして，この資料２ページから６ページまで，高等学校の配置図等を示しており，設置者ごとに公立，私立，国立の高等学校の配置図を添付しております。

まず，２ページは，公立の全日制課程でございます。高校には大きく普通科，専門学科，総合学科の３つの学科がございます。普通科は普通教育を主として行う学科でございます。

県立高校の普通科の中には，地図中央部に太陽のようなマークで表わしております広島高校でございますが，この学校は併設型中高一貫教育校で，中高６年間の計画的，継続的な教育活動により，幅広く深い教養と高い知性を培い，グローバル化時代において活躍できる人材の育成を目指しております。併設型中高一貫教育校には，市立でございます，広島市立安佐北高等学校と，福山市立福山高等学校がございます。市立高校としては白丸でお示しをしております。また，地図の左上，さらには中央，さらには右下寄りに二重丸で示しております連携型中高一貫教育校がございます。

次に，専門学科は，工業，農業，商業などの専門教育を主に行う学科でございます。県立高校では，工業，農業，商業の各分野で２校ずつ専門高校拠点校を指定し，県内の職業教育のセンター的な役割を担わせております。この拠点校は，具体的には，工業で

は広島工業，福山工業，商業では広島商業と尾道商業，農業では西条農業と庄原実業でございます。また，県中央部に工業，商業，家庭の複数の学科を持つ総合技術高校を設置いたしております。

次に，総合学科は，普通教育と専門教育の科目の中から生徒が選択して学ぶことが可能である学科で，平成６年度に制度化された新しい学科でございます。

また，全日制課程の市立高校は，広島市，呉市，福山市に設置をされております。

続きまして，３ページの表は，県内の公立高等学校を平成24年度の第１学年の学級数，１学級から９学級の別に分類をしたものでございます。公立の全日制課程の高校は，右下にございますが，88校となっております。

続きまして，４ページは，公立の定時制，通信制課程の配置図でございます。定時制課程の高校は，県立のほか，広島市立２校，尾道市立１校がございます。設置の形態といたしましては，全日制課程の学校と併置されている学校が多くなってございます。定時制課程の単独校といたしましては，県立の芦品まなび学園高校，広島市立の大手町商業高校，尾道市立の広島県尾道南高校の３校がございます。これまで定時制課程では，勤労青少年の就学が多かったため，夜間に学習をする夜間課程が多く設置されておりますが，午前に勉強する午前部を設置している学校もございます。こうした学校では，志願者が多い傾向があります。また，午前，午後，夜間の３部で授業を行い，一定の範囲内で自分の所属する部以外の時間帯の授業を受けることができる多部制の学校である芦品まなび学園高校もございます。

次に，通信制課程では，県立では西高校，東高校の２校がございます。通信制課程では，通信による教育を行い，レポートの提出や，スクーリングでの学習を行っております。

続きまして，５ページは，私立の学校の配置図でございます。本日お手元のほうに資料としてお配りをしております冊子，「私学わーるど」の８ページを抜粋したものでございますが，県内には全日制高校が36校，多くの学校で中学校が併設をされている学校となっております。また，通信制高校は，私立では４校がございます。このほか，この配置図にはございませんが，株式会社立の通信制高校が１校ございます。

次に，６ページを御覧ください。６ページは国立高校の配置図でございますが，広島大学の附属高校として広島市，福山市に各１校設置をされております。いずれも中学校を併設されておられます。

７ページ及び８ページの資料は，高等学校の設置状況を設置者ごとに，設置コースや入学定員の面からまとめたものでございます。なお，入学定員は平成24年度のものといたしております。

７ページを御覧いただきますと，全日制課程では，国立は普通科が400名，公立の普通科は専門学科との併置校と合わせて１万1,120名，私立の普通科は7,844名と，国・公・私立を合わせて１万9,364名で，普通科の入学定員が多く，いわゆる普通科志向の高い状況となってございます。専門学科につきましては，公立が普通科併設を含めまして3,840名，私立は777名となっております。また，総合学科につきましては，公立が2,400名，私立は120名となっております。

８ページは，各学科別の概要でございます。設置者ごとの学校数と入学定員，教育内容を記載してございます。

９ページは，課程別の日課の例でございます。全日制課程では，月曜日から金曜日まで週５日間，１日６時間程度学習をいたしております。７時間の授業を実施している学校もございます。定時制課程では，夜間部を設置している学校が多く，夜間部では午後５時過ぎから授業が開始となります。定時制課程では，通常４年間で卒業となりますが，午後４時くらいから授業を受けることにより，３年間での卒業が可能となる制度もございます。また，３部制の学校では，午前部４時間，午後部４時間，夜間部４時間の授業を行っており，生徒は自分が所属している部の授業を中心に学習をしております。通信制課程では，科目ごとのレポートの提出を行うほか，月に２回から４回程度スクーリングとして登校し，教員から指導を受ける形で学習をしております。最近，私立高校の通信制では，平日に毎日登校する平日登校コースを設置されている学校もございます。

10ページ及び11ページは，高校卒業後の進路の状況についての資料でございます。

10ページは，全日制，定時制，通信制ごとの進路でございます。全日制課程では，６割を超える生徒が大学等へ進学しており，就職は１割強でございます。定時制課程では，就職者の割合が高くなっております。通信制課程では，進学でも就職でもない者の割合

が高くなっております。

11ページは，学科ごとの進路の推移でございます。普通科では，大学，短大への進学が約７割となっております。また，就職者は約７％でございます。専門学科では，就職者は４割を超えておりますが，大学，短大等への進学者も増加をしております。

12ページには，参考といたしまして，高校生の就職をめぐる状況について，報道提供資料をつけております。昨年度の国・公・私立高等学校卒業者につきましては，普通科の就職希望者は1,179名で，全体の就職希望者の約35％を占めておりますが，専門学科や総合学科と比較して，普通科は就職の決定が難しい傾向がございました。

それでは続きまして，資料番号４，県内高校の取組を御覧ください。

（１）県立高等学校につきまして，特色ある学校・学科の設置といたしまして，併設型中高一貫教育校である広島中・高等学校，連携型中高一貫教育校である加計高等学校芸北分校，複数の専門学科からなる学校である総合技術高等学校，専門高校における拠点校の６校，スポーツや芸術で特に優れた力を発揮する人材を育成する学校である広島皆実高等学校体育科及び熊野高等学校普通科芸術類型，多部制定時制単独校である芦品まなび学園高等学校，以上の11校を御紹介しております。また，県教育委員会の重点施策として実施をしております高等学校学力向上対策事業，及び県立学校海外交流推進事業を御紹介しております。さらに，私立高等学校につきましては，別冊，先ほど御覧をいただきました「私学わーるど」に，各学校の取組が掲載をされております。

それでは続きまして，資料番号５を御覧ください。

資料番号５は，他の都道府県に所在する国・公・私立高等学校につきまして，事務局のほうで文部科学省報道発表資料「高等学校教育の改革に関する推進状況（平成23年度版）」及び学校ホームページを参照いたしまして，一番左側の列にございますように，グローバル化に対応した学校，特定分野に特化するなど高度な教育によって生徒の夢や進路希望の実現を目指す学校，スポーツ，文化等の優れた力を発揮する人材を育成する学校，ものづくり技術，伝統文化を学習活動に取り入れた学校，不登校，中退，発達障害等の障害のある者などに必要な支援を行う学校の６つの観点によりまして，特色ある取組を実施されていると考えられる学校をあげたものでございます。以上が事務局からの資料でございます。

また，資料番号６を御覧ください。

この資料番号６の資料は，本日，御都合により御欠席の青木委員から御提出をいただきましたものでございます。（１）グローバル化に対応できる人材，（２）家庭科，看護科の充実，（３）水産科の新設，（４）一般的な課題につきまして，御意見をいただいております。

説明は以上でございます。

坂 越 会 長： はい，ありがとうございます。多種類の資料を簡略に説明していただきましたので，ちょっと追っかけるのも大変かと思うんですが，まずは，もちろん，ここの委員の皆さん方は，高等学校教育に御関心をお持ちで，多分問題ないと思うんですが，この説明の中で聞きなれない言葉とか，これ何だろうというのがありましたら，先に説明をお願いしたいと思うんですけど。ちょっと中継ぎというか。県内の高校の特色の一つとして国際科がありますよね。国際というのは，何を売りにして国際というような言い方になっているんでしょうかね。はい，いきなりですみません。

永井学校経営課長： 国際科は，安芸府中高等学校に県立では設置をされてございまして，教育課程で普通科にはない語学，国際関係の豊富な科目が履修をできると同時に，多様な進路に対応できるように編成をしてございます。また，英語教育の改善に資する研究，海外研修などの国際交流の積極的な取組を行うなど，本県の英語教育，国際交流活動をリードする取組を行っている，そういう学校・学科として設置をされたものでございます。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

それと，会長がものすごい素朴な質問で申し訳ありません。先ほどの説明の中でも普通科志向が強いと，多分それはいろんな，大学進学のこと等あると思うんですけれども，今，毎年毎年，春にはそれぞれの高校の志願倍率等々出ますけれども，専門高校へのニーズといったことについては，教育委員会のほうはどういうふうに把握をされているのか，ちょっと，すっとは出ないかもしれませんが，もし御説明がありましたら。

永井学校経営課長： 中学生のニーズにつきましては，毎年６月前後の段階で，来年度の進路希望についての調査を行ってございます。その段階では，やはり普通科への志向というのが高くなってございます。専門学科を特化させた形でニーズ調査というものをしたものは特にはご

ざいませんけれども，結果として入学志願の状況で，私どもはその状況を把握するという形になってございます。

坂 越 会 長： 露骨な聞き方をします。定員割れになっているようなところはないということでしょうか。

永井学校経営課長： 専門高校，高校専門学科で，志願の段階で定員が割れてございますのは，福祉科，それから国際科。それ以外の学校・学科につきましては，1.0を超えている状況でございます。

坂 越 会 長： ありがとうございます。いきなり難しいことを聞いて申し訳ありません。

委員の皆さん方のほうから，何か確認されたことがございますか。

はい。

川 野 委 員： 今，先生が聞かれた国際科のことでちょっと気になったんでね。多分，安芸府中は，国際科が，当初は，できたころはよかったはずなんですけれども，徐々に徐々に普通科のほうが人気が，今は，まさに今，課長さんおっしゃったように，割れてるとおっしゃって，たしかクラスを２学級を１学級に減らしたんじゃなかったかと思うんですね。これは，グローバル人材と言ってるのに，何でこういうところが，うまく中学生のニーズと合わない何かがあるのかなあというのをちょっと伺ってみたいなと，引き続き思ったんですけど。

永井学校経営課長： 正確なとこを申し上げるのはなかなか難しゅうございますが，校長先生にお話をお聞きしますと，基本的に将来の進路を見通したときに敬遠をする，そういう中学生の判断が働いている要素はあるようです。それから，学校での勉強が難しいのではないかというふうに思っている中学生もいるというふうにお聞きをしております。

坂 越 会 長： 実はそういう，川野委員からいただいたような，具体的にこういう分野だったり，こういうとこ本当はもっと力を入れるべきじゃないかというのは，今日の本論のほうでもぜひお願いしたいと思っていたところですので，ほかの委員の皆さんからも御意見伺いたいと思います。事務局からのいろんな高校の状況についての御説明につきまして，何か確認したいようなことがありましたら。

ああ，はい。

永井学校経営課長： 少し補足でございますが，国際科につきましてはマツダの関係が特にございまして，地域的にもそこに設置をしたということがございますけれども，マツダとの関係が，多少，設立当初より薄くなってきているという状況はございます。また，先ほど専門高校，専門学科の部分で倍率の部分を申し上げましたけれども，学校・学科によっては，農業の部分，あるいは工業の部分で1.0を割っている学校・学科もございます。先ほどの1.0を割っているのが福祉科，更には国際科と申し上げたのは，県平均全部トータルをした場合の状況でございまして，特定の高校の特定の学科という部分に見た場合は，工業の部分，あるいは農業の部分で1.0を割っている状況はございます。

坂 越 会 長： 必ずしも倍率だけの話ではなくて，いろんな環境状況もあるとは思うんですけれども，そういう実態があるということで。また途中で，説明内容についての御質問があったら出していただければと思うんですけれども，これからのこの会の論議といたしましては……ああ，どうぞ。

小 村 委 員： 高等学校を卒業した後の進路の表がありますね。大学進学が一番多いですが，その下に専修学校へ進んでる子が，約２割という数字があります。この実態は，大学に行けないから専修学校へ行くということなのか，いわゆる手に職をつけるという意味合いで，自分の志を持ち希望として行っているのか，その辺の実態が，もし分かりましたら教えていただけますか。

坂 越 会 長： いかがでしょう。

永井学校経営課長： 正確に把握をしているという状況は必ずしもございませんけれども，１つには，資格取得のために専修・各種学校へ進学をされるという状況はございます。

坂 越 会 長： これも正確ではありませんけれども，大学関係の情報誌の中では，やっぱり今，大学は出たけれどという現実がありますので，やっぱり具体的な資格だったり，こういう技術を身につけるという志向があるというふうに出ています。

小 村 委 員： 積極的な意味合いですね。

坂 越 会 長： はい。何かありますでしょうか。いいですか。はい。

それでは，本論といいますか，今日の会議の初めに出していただきましたように，これまで３回の会議で，例えばグローバル化に対応できる人材ですとか，科学，文化，スポーツ，特定の分野で力を発揮する，あるいは郷土の文化を知る，その上で社会に貢献

できるといったような人材像，これから社会で生きていくための一つのモデル像というものが提示されています。これを具体的に高等学校教育の中で実現していくとして，現在の，この県内の，国・公・私立を合わせた高等学校の中で，ちょっと先ほど国際科のことも出ましたけれども，できているところ，できていないところ，いろんな資料の中でもありましたけども，現在，県内国・公・私立136校ですかね。なおかつ，通信制の高校で，県内に拠点を持って結構生徒を集めているというような高校もあったりします。

そういう中で，広島県の高校生として育成すべき人材像との重なりぐあいですよね，こういったものについて御意見をいただければと思うんですけれども。先ほど，資料番号６の中で，青木委員さんから，すごく具体的な話として，先ほどグローバル化ということでは国際科，しかし国際科というのは，今現在あるところだけではなかろうという話。さらには，もっともっと，今，ちょいちょい出てますけれども，外国の大学に進学することを想定したような高等学校ということもあっていいんじゃないかとか，それから，専門学科のほうでは，家庭科，看護科，さらには水産というような御提案，アイデア。そして，最後の一般的な課題としては，地域に根差して活躍できる人材ということで，いわゆる高等学校のカリキュラム，プラスアルファといいますか，インターンシップだったり，ボランティアということに，もっともっと力を入れるべきだというようなお話をいただいております。こういう青木委員さんの御意見も御参照いただきまして，御出席の委員さんの，これからの高等学校，広島県として求められる領域であったり，あるいは人材とかかわるような，そういう高校の在り方について，御意見をいただけたらと思うんですけれども。

その中で，最初か中間かはわかりませんけれども，古賀委員には国立高校ではどうだとか，それから武田委員さんには私立ではどうでしょうかと振りますので，ちょっとまたお願いをしておきます。

すみません，前先生，一言，皮切りを。

前　委　員：　先ほど，国際科のことについて，ニーズがあるのかどうかという話があったと思ったんです。これからの高校の在り方ということを考えたときに，どうしても特定の分野にというのも，一つのこれからの方法だというぐあいに先ほどあったように思っています。具体的には，前回もお話をしましたけども，本校には理数コースを設置しております。これも，やはり定員が割れたり，オーバーしたりという繰り返しであります。じゃ，果たしてニーズがあるのかということも，今検討しているところなんですけども，文科省のほうでも理数の充実ということがある中で，やらなければいけないことだというぐあいに私は思って，理数コースの充実のようなものをやっているんですね。だから，ニーズがあるからする，ないからやめるというのは，どうなのかと。これからを考えるときにですね。それよりも，そういう方向にもっていくような子どもたちを育てていくということを考えて，これからのことを考えなくてはいけないのかなということを，今，お話を伺いながら考えておったことなんです。

以上です。

坂 越 会 長：　確かに，お話のとおりかと思いますが，中学校ですよね，高校と中学の接続。中学生たち，卒業生が高校を選択するときに，当然，大学進学というようなことも念頭には置くんでしょうけれども，何て言えばいいんでしょう，こういう分野，国際だったり，福祉だったり，こういう社会で活躍できる，そういうコースがあるよということが，なかなか中学生に伝わってないというのか，そのあたり，先生，いかがですか。

佐々木委員：　中学校と高等学校，実は，この前もちょっとお話ししたかもしれませんが，広島県には，小学校，中学校，高等学校の校長会の縦のつながりのある組織があるんですね。広島県公立学校校長会連合会，ちょっと長い名前なんですが，県公連というふうに言ってます。そこで，進路未決定者が増えたというところもあって，平成23年度は中高の連携を深めようということで，中学校から高等学校へ授業に行かせていただいたり，逆に高等学校から中学校のほうに授業に来ていただいたりというようなことがありました。そういう意味では，かなりやってくださいということでアピールをしたということもあって，その前年度と比べたら，それこそ倍以上の交流があったということがあります。その成果がすぐ進路実績に出てるかどうかというのは，先ほど定員云々というのはありましたけれども，県中校長会が，たまたま昨年まで事務局を担当させていただいての実感では，本当にそれぞれの学校が意識的に取り組んでいただいて，一定の成果は数値の上でも上がってきていたんではないかなという印象は持っているところです。

ただ，中学校の３年生まで，進路についての学習は，キャリア教育はやってくるわけ

ですが，なかなか，生徒自身が実感として，高等学校をステップとして，その次に自分の未来像みたいなのものを持ってるかというと，なかなか難しいんですね，そこらあたりが。だから行ってから，普通科にとりあえず行って考えてみようというようなところがあるんではないかというふうに思います。

はい，以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

保護者の観点といいますか，じゃ，毛利委員さんから。

毛 利 委 員： そうですね，やっぱり欲張りなので，普通科もいいし，今議論されてきたように，特別なスペシャリストになれるような，そういうものに特化したところに魅力も感じるというのが実感ですけども，その辺の宣伝というか，広報が，まだまだ届いてないかなという感じはしています。

例えば，私，子どもが舟入高校で，国際コミュニケーションコースではない普通科のほうでしたけども，入っていくときは，多少コミュニケーションコースのほうが低いランクでも，将来，卒業するときには，普通科よりも上がっていくみたいなことがあって，どういう中身が学べるかということを，もう少ししっかり伝えていただければいいかなというふうに思います　もう一つ思っているのが，やはり普通科であっても，学校にいろいろ併設していろんな学科がありますよね。もう一人の子どもが，皆実高校に行っていたんですけども，例えば普通科と体育科と衛生看護科とあって。その中で，部活とか学校行事等は一緒にやっていて，看護師になることを目標にしている人たちと出会えば，普通科の子たちも非常に刺激を受けたりということもあって，学校全体として，どういう学校を選んでいくのかというとき，専門的なところがあるというのは，非常にいい影響があるなと思ってますけど，まだまだ，授業内容で何か連携してるというところまではいってないような気もしていて，そういう学校内でいろんな科を持っているところで，連携し合って，相乗効果を与えるようなことができないかなというようなことは感じています。

坂 越 会 長： ありがとうございます。ちょっとこれ，会長のお願い。今のお話，本当に特徴のある高校で，特徴のある授業だったり，特徴のある先生を，関係高校で人材活用というか，やっぱり連携で動いていくというのは，もうなされている部分はあると思うんですが，すごくいいアイデアだと思いますので，ちょっとチェックしといてください。

加藤委員さん，いかがですか。

加 藤 委 員： 参考になるかどうかわからないんですけども，私，４人子どもがおりまして，３人高校を卒業しましたが，長男は普通科，次男は商業科，三男は工業科と，いろんな科を渡り歩きました。何と大学に行ってるのは工業科に行った息子でありまして，ちょっと変わったことをしております。普通科に行く志向が強いと言われた，まさにそのとおりだろうと思うのが，何の問題もなく小学校，中学校を過ごされた人は，ほとんど普通科に行く傾向が，ほかの保護者さんと話してても多いんだと思うんです。中でいろんな刺激を受けられたりとか，ちょっと挫折した子どもさんを持つ親は，専修の学校とか，ちょっと特色のある学校ということを考えられる傾向が，私の周りでは強いように思いました。特に，私の次男，三男は不登校をしましたので，そういう意味では普通科ではなく，どこだったら合うだろうなという観点で学校を決めたような気がします。

今，ちょっと話しながら気になったのは，ここの会議でもそうですし，ほかの会議でも，今，グローバル化ということで，どうやって国際力をつけていくかという流れの中にあって，国際科がどうしてそんなに人気がなかったのって，ちょっとびっくりしてしまったんですけれども。ちょっとお聞きしたいのが，国際科というのは，どういうことを普通科とは違う取組としてされてらっしゃっているのか，ちょっとお聞きしたいと思いました。

坂 越 会 長： すぐに出ますか。じゃ，お願いします。

古前高校教育指導課長： 高校教育指導課課長の古前でございます。

安芸府中高校でございますけれども，まず，教科の中身としましては，国際科でいいますと，一般の，例えば英語の科目につきましては，専門科目の英語をやっておりまして，これ教科書がございません。例えばアメリカのコースブックというような英語でのみ書かれたような教科書を使って学習をさせるといったような，学習の内容の面で一般の普通科の高校よりも，ある意味では専門性の高い，高度な教科の中身を学習するということをやられていたり，あるいは時事英語でありましたり，コミュニケーション関係を重視したような科目を開設したりしているということがございます。

それから，先ほども学校経営課長の説明にもありましたように，国際関係ということで，やはり実践的に英語を学ぶということと，実際のコミュニケーションを通して英語を使うという体験をする，あるいは異文化に触れるという体験をするということを重視する観点から，現在でも姉妹校４校を持っているというふうに思いますけれども，そういった学校への海外派遣研修といったようなものを計画的に実施をするということをしておりますし，あるいは，大学と連携して海外の学校とテレビ会議システムを使った交流活動であるとか，あるいは，府中町ですか，町内の小中学校と連携して英語の活動を行うとか，そういったような英語に特化し，またコミュニケーション力を高めるということを重視した，そういった学習活動に取り組んでいるというふうに把握をしております。

坂 越 会 長： もう一突込みしますね。お話を伺うと，ものすごく魅力的で，それこそ社会に出ても力が発揮できると思うんですけれども，もう，少しは，中学生の意識みたいな話も出ましたんで，背景はわからないわけじゃないんですけれども，そこにもうひとつ人気が集まらないのは，県教委としてはどのようにお考えですか。

堀野教育次長： 教育次長でございます。

国際科というのも，他県でもいろいろな過去の経緯で設置をして，広島県で言えば，マツダ関連の帰国生徒が多数入るという期待もあって設置をされたんですけれども，そういう生徒が実際は減ってきているということがあって。まあ，ある理由があって，その場所につくる。私が赴任してた他県でも，昔はこの港町が国際的な雰囲気の場所だったんだけれども，今は別の港だったり空港だったりが物流の中心だとすると，何でこの港に国際という学科ができたんだろうというような状況に変わっていたりします。そういうことでして，地域事情の変化ということが１点ありますのと，先ほどの理数の話でもありましたけれども，じゃ，国際の学科を出た後にどういう進路があるのかということで，実際に国際のことを学んだから国際らしい進路，大学であったり，就職であったりということが，皆さんそういうふうに行ってるということだと一つの魅力になるんだと思うんですけれども，実際の進路を見たときに，それほどの特徴が普通科と比べて出ていないということが仮にありますと，わざわざそこに行くか。中学校３年生の時点で，逆に言うと，特定の，国際なら国際，理数なら理数というふうに，ある意味幅を狭めてしまうと，将来つぶしがきかないんではないかという，ちょっと不安が出てくるということで，その特色を設けた場合に，それが結果までつながるのか，自分の進路が狭まるのかというところで，中学生が悩むところがあるかなというふうに受けとめております。

坂 越 会 長： また後ほど，県内の高等学校が，ある機能に特化するとか，ある機能を強化していく，一つの個性，特徴を打ち出すということではあり得ることだろうと思うんですけれども，その打ち出しですよね。現代社会の中で，これもちょっと言い方が露骨になりますけれども，大学進学率をうちの高校の特徴だと言えば，多分ニーズというか，人が集まるだろうと。そうじゃない特徴を出したときに，それがちゃんと受けとめられにくい状況があるというのを，そういうところが何かあるのかなというふうに思ったりもしますが，少し観点を変えて，今度は，社会といいますか，もちろん進学する高校生ばっかりじゃなくして，12点何％余りの高校生は就職もしていきますし，当然，高等学校，大学を経て，そこを経過して社会で活躍するということになっていきます。現在の高等学校の在り方，普通科，それから専門学科，あるいは特徴のある高等学校教育，そういったことを，今，お話，いろいろ出てきたところをお聞きになった上でというのを，ちょっと難しいかもしれませんけれども，社会で御活躍されている委員の皆さんからは，どんなコメントが出るかということをお願いしたいと思うんですが。

冨 永 委 員： ちょっと観点が違うかもしれませんが，今もお話のほう聞いてまして，私は思うんですけれども，広島県の高校を，全部まとめてちょっと議論したんでは，なかなか焦点が絞りにくいんじゃないかという感じがしております。人口で減少している中山間地域，あるいは島嶼部，このあたりの高校ですね，いわゆる小規模校と定義をされている高校と，それから広島市，福山市等を中心とした都市部の大規模校を中心とした高校，これらをちょっと分けてイメージをして議論したほうがいいんじゃないんかなという感じがいたします。

例えば，この都市部であれば，今，安芸府中高校の国際科，リーディングケースだというような説明がありましたけれども，じゃ，リーディングとして何をやったのか。多分何もできてないんじゃないかという気がしますけれども，ほかの学校でそれを設置すれば，生徒が集まってくる可能性もあるんじゃないんかという気もします。そういった

意味では，思い切っていろんな特色ある学科を，まあ都市部ではどんどんやってもいいんじゃないかなと。あるいは，もっと極端に言えば，スポーツとか芸術とか，こういったものは，もう単独校をつくるぐらいの気持ちがあってもいいんじゃないかと思うんですね。私立学校もいっぱいあるわけですしね。国立もあるわけですし。ちょっとそういったふうに，小規模校，中山間地域の高校にはそのやり方があるし，都市部にはそのやり方があるしという考え方で進めていただければいいかなという感じを持っております。

坂 越 会 長： はい。そういう地域性といったことの観点も，ちょうど，今日，地図に落とし込んだ資料も出していただきましたし，そういうことも踏まえてということですね。

中川委員さん，いかがですか。

中 川 委 員： 思うのに，それぞれの学校が，何か１つすぐれた特色のあるものを持ついうことね，これも大事なんじゃないかと思うんですね。ただの普通科の高等学校で，それは大学の進学率のいいのも一つの特色になるかもわからないけど，だけどそれ以外のことで，この学校はこれがものすごくすぐれてるんだ。難しいかもわかりません。まあ教員が替わり，転勤があるんですからね。替わってくると，またころっと変わってくるんよね，それが。そういうことがあるから難しい面はあるとは思いますが，１つの高等学校，農業高校なら農業高校でもいいし，いろんな学校でもいいと思うんですけど，この学校へ行けばこういうすばらしいのがあるんだ。そしたら広島県，どこからでも来るんじゃないかと思うんですよね。それを目指す子は。それを出せというの難しいかもわかりませんけど，欲しいですね。

坂 越 会 長： はい，ありがとうございます。今日はちょっと御欠席ですけど，世羅町長さんが欠席ですけど，そういう事例もあったりしますよね，確かにね。

じゃ，長田委員さん，お願いします。

長 田 委 員： まさに中山間地のほうの人間ですので。以前も言いましたように，ちょっと新庄高校のほうの経営にも加わっとるんですけど，まず，先般，４日の日に，たまたま，ここにあります連携型の中高一貫の，芸北の加計高校の芸北分校ということで，そこの地域の小中の校長会と一緒にちょっと会議がありまして，もう張り切って，地域，それで小中高と連携をとって，非常にいい教育をされております。それでプレゼンされても，本当，先生方が，言葉は悪いですが，水を得た鯉のようですねとか言ったんですが，もう自信を持ってやられるわけですよね。それで，私が質問したのは，わかりましたと。それだったら，ある意味で最終目的というので，例えば高校を出ましたと。小学校，中学校をやって出ましたと。それで，最終的にはどこの大学へ行くというのは別にいいんですけど，地域へどう帰ってくるんですかという質問をしたんですね。答えは，先生，皆，うーんと悩まれました。というんですが，私，すばらしいことだと思うのは，一時的には都会で就職しても，帰ってくる率は高いと思います。やっぱりものすごく必要なのは，先ほどから出てるように，それぞれの立場に合った高校というのは物すごい必要だということじゃないんかなと思います。

もう一つの現象が，ちょうど中山間地で，島根県と広島県のちょうど県境にございまして，今，子どもたちの動向が，例えば，新庄高校が野球が強くなったために，せっかく自分たちの地元の高校であっても，あっこへ行ってもレギュラーになれんぞということで，島根県の学校に行くんですね。それで，これが今度は口コミで，おい，ええぞ，ええぞということで，向こうのほうが人気が出てきまして行くわけですよ。それで，反対に，また私学の新庄に戻しますと，やはりこれも少子化で非常に悩みがあります。経営の中でですね。だけど，去年までたくさん進学で受験してくれた子どもが，ことしは何でおらんのかなという。非常にその動向も，我々が普通の統計とかなんかで見るような感じでは考えられません。だけど，１つわかるのが，子どもたちの口コミです。ええぞと言うたら必ず来ます。ですから，特色も必要だし，物すごい必要なことだと思うんですが，やっぱり子ども同士のネットワークの情報というのはものすごく怖いなというのを，今，痛切に感じております。だから，あくまでも通過地点なんで，やはり今，いろいろ特色があるところを，やっぱり充実していくということが一番必要なんじゃないかなと，なくてはならないもんじゃないかなと思います。

はい，以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。本当にいつも基本に返るんですけれども，そうやって口コミで在校生が，ああ，ここへ来てよかったというのをしなきゃあ次に続かないということになるわけですよね。

続けて，社会といいますか，高校生を見ておられる目線で，どんなふうに，今，何が

必要かというふうにお考えになるのか，寺西委員さんと，それから三好委員さんに続けてお伺いしたいと思うんですが。

寺 西 委 員： すみません。私も山の中に住んでいる者です。先ほどからいろいろなことでお聞きしながら，まず，先ほどの中で，特色ある，地域性を生かしたということでは，御紹介できるとしたら，神楽が女の子でも舞える，だからこの高校に来ましたって言って，遠くから県北のほうの高校に来る。ある高校は，先生がカメラの指導がとても上手で，みんなカメラというものを通して，地域をいろいろな形で切り取りながらつないでいくという形で，本当にその地域に合ったり，特色があったりする部分で，高校が輝き始めています。まだまだ本当に始まったところだとは思うんですけれども，いろいろな形で話を聞かせていただきながら，私が長年，不登校の子どもさんたちと過ごしながらとても感じている部分が，やはり高校というものが，本当に，確かにグローバル化でしたりとか，すぐれた人材をとか，様々な，社会へ貢献できる，リーダーシップを持ったとか，すごく素敵な言葉なんです。ただ，ドーナツもおいしいけど，あんパンもおいしいということで，田舎を真ん中に考えていただいたら，どんどんどんどん地方から都会へ出て行ってしまうドーナツも確かにおいしいんですけど，お腹にあんを埋めれば，本当に田舎でも，特に自然というものがついて回っていますので，おいしい地域性が出る高校になると思います。

１人だけ，子どものことで紹介させていただきましたら，中学校へ３年間行けなかった子どもがおります。その子がずっと悩んで，ある教育委員会さんがされてる団体に，私も行かせてもらってました。そして，東北大震災が起こったとき，彼は高校３年生でした。３年間は高校に行けました。休まずに行けました。自分の地域を離れたんですけれども，小さな高校だったんですけれども，行くことができました。そして，その震災が起きた数日後から，どんどんずっと電話がかかってくるのが，私，玉ネエと言われてるんですけど，玉ネエ，何かできることがないだろうかということで，その彼の声を聞きながら，県内から漫画ですとか，児童書とか，絵本とか集めて，本を届けたりとかいう活動をさせてもらっております。２日前に私も３回目の東北から帰ってきたんですが，彼の言葉で大人が動きました。すごく３年間，中学校時代は痛みを感じてた子どもだと思うんですけれども，逆に痛みを感じてる人々の声を聞いて自分で活動できた，その３年間の高校生活っていうものは，とても貴重な３年間だったと思うんです。ですから，特色のある，様々な力をつける学校っていうのに加えて，人間を育てる，社会へ出る一歩前の大切な橋渡しをする教育の機関であってほしいなと思います。すみません，長くなりました。

坂 越 会 長： いえいえ，ありがとうございます。

じゃ，三好委員さん。

三 好 委 員： 特色を出す場面を考えたときに，各科ごとに，その学科の中で特色を出していくということが，今，説明していただけたことだと思うんですね。

もう一つの視点として，課外の，学校行事等ですね，そんな中に特色を出していくということがあるのではないかなと思うんです。たまたま，私の事例なんですけれども，もう50年も前になりますかね，あ，50年まではならないかもしれません。私は舟入高校を選んだんですね。当時は５校選抜という時代だったんです。選んでも必ずしもそこに行けるかどうかはわからないんだけれども，それでもやっぱり第一希望，第二希望と選ぶ状況に置かれたときに，何を自分が尺度にして舟入を選んだのかなと思ったときに，当時は舟入は広大の合格率が非常に高かったんですね。それで選ぶ人が多かったんです。私にも，ああ，広大に行きたいから，舟入に行ったら広大に行きやすいから行くのかって言う人がいたんですけど，全然私の場合はそうじゃなかったんですね。

当時，蛍雪時代という雑誌だったと思うんですけれども，そこが取材をして，各学校の特色というのを毎月毎月出していた，その記事から舟入に魅力を感じたんですけれども，その記事のどこに魅力を感じたかというと，もう今でもはっきり覚えているんですが，生活実習という行事と，それからサービスボックスという行事があったんです。それは何かといいますと，サービスボックスというのは，１日授業に出ないで，校門にある守衛さんのいるような建物なんですけれども，そこに４人ほどが１日いて，校外から来られる方々の対応をしたり，校内を定期的に見回ったりということをするんですね。その１日の授業に関しては，クラスでちゃんとノートをとってだれかが伝えてくれるというふうなシステムが，３年間の中で１回だけ体験できるということがあったんです。それにまず魅力を感じたのと，それから生活実習というのは何かというと，学校の敷地

の中に１軒のおうちがありました。当時。そこで実際に２泊３日の生活をしながら学校に通うということがあったんですね。当然，女子の場合は，当時はですよ，女子の場合は自分たちで食事もして，宿題等もしながら，クラブもしながら，同じ敷地の中で学校に通うというふうになる。男子の場合は，今考えればおかしいなと思うんですけれども，当時はそれが当たり前なんで，家政科の生徒たちが食事を準備してあげるみたいな，今考えれば何でそんなんなんだろうと思いますけど。そんなことで，これは，全く普通科の教科のカリキュラムの中にあるものとは全然違ったところでの特色がその記事として上がってたんですね。そこに魅力を感じて行ってみまして，卒業した今ですね，やっぱりあの体験はよかったと思うもんですから，そんなところでも特色の出し方というのもあるのではないかなというふうに思います。

坂 越 会 長： ありがとうございます。本当に課外，正課外あわせて，それぞれの学校が個性的な特徴を打ち出すこと，魅力をアピールすること。それも本当に，現在もいろんな高校で取り組んでおられることだと思うんですよね。もちろん，それを一つの柱としながら，教育行政というか，県の高校の支援の仕方としては，どういう形があり得るのか。もちろん，そういう学校独自に取り組める活動に対して，それをサポートしていくことと同時に，今度は県内の高校教育の在り方を考えて，すごく特徴がある学校があっても，すごく離れていれば通えないというような物理的な条件もあるでしょうし，そういう行政としての将来像，構図みたいなものも，やっぱり考えなきゃいけないんでしょうけど，ここは難しいですよね。まあ，これは今日の答えにはならないと思います。

もう少し。はい。

川 野 委 員： そう思って，今，安芸府中高校のホームページをちらちらちらっと見てたんですね。とってもすばらしいというか，よくやってるなあと，国際科のところを見させていただいたんだけど，ふと考えたら，これ武田先生お詳しいと思うんです。ここに書いてあること，私学，十分やってんじゃないかなと思ったんですね。だんだん，あるときは先駆的に始めたことであるとしても，今，グローバル化とか，いろんな特色ある教育，スポーツだとか，あるいは音楽だとか，そういうことを逆に県がやるのと同時に，やっぱり私学も特色として打ち出していかないと，やはり私学はもっと，学費をしっかりちょうだいしてるとこだから，特色を出さないと集まらないわけです。あるいは進学実績を出さないと私学は集まらないですね。私学の中高。そうすると，私たちは，公立学校どうあるというときに，やはり反対側の私立の学校の特色についても十分分析，あるいは検討しておいて，このすみ分けを考えておかないと，一生懸命公立のことだけ，よかれ，よかれと考えていったとしても，私学の中高一貫にかなわない，あるいは，むしろ向こうがもっと先を進んでるということもあるのかなというふうに思った次第です。もし，武田先生のほうから何か，その辺のことをお話があったら。

坂 越 会 長： 武田委員さんには，次，振ろうと思うんですが，川野先生がちょうどマイク持ってくださったので。芸術関係ですよね，先生は音楽ですけれども，ほかにも美術もありますが，そういうものに特化した現在の広島県内の高校，今紹介ありましたけれども，それについて先生はどういうふうに見ておられますか。そのニーズはもうこれで十分じゃないかとか，いや，まだあるんじゃないかとか，いかがでしょう。

川 野 委 員： 広島音楽高校が１つあると思います。私学では。非常に学生募集は苦戦してると思います。音楽だけに特化してるというのが，やはり卒業後の進路，あるいは，エリザベトも同じなんですけど，すぐ言われるのは，卒業したら何になれますか，音楽家になれますか，それで食べていけますか，というところにおいて，ああ，芸術の場合，美術であるとしても同様なことが言えるかもしれません。だから熊野高校のように，熊野高校は１年生のときは普通科としてあって，２年から単位が書・美・音で，それぞれの分野で増えていくはずでしたよね，ここの先生方。だから，一応普通科の中の芸術類型のほうが，逆に言うと，さっき言ったようにつぶしがきく，いろいろ幅広く勉強しつつ一部を特化していく。そこに私たちも，あるいは他の大学，あるいは書であれば中国四川省とかかわりを持ってるという，そういうやり方っていうのは，非常に，途中でやはり道を間違えたと思った子に対するケアにもなるような気がします。芸術だけの一本だと，やはりいろんな，進路変更とかしたときの，うまくいかない例も出てくるんではないかなと思います。

坂 越 会 長： ありがとうございます。まあ複合タイプみたいなものですよね。主専攻，副専攻だったりっていうようなイメージ。私学，特に高等学校教育，県内でも３分の１担ってらっしゃるところ，それから私立高校と公立高校の状況，まあ余りいい例じゃないかもしれ

ませんけれども，教育学を多少かじっている私たちの間で，ひとつ今，課題検討に上がっているのは大阪なんですよね。大阪が公立，私学，競争させて，特徴を打ち出せと。公立でも定員割れしたら，もう次ないでっていうような世界。そういう行政の在り方，高校教育の在り方が一体どうなのかっていうような，まあ研究者が言ってる話なんですけど。そんなことも状況もあったりして，なかなか，ある意味，互いに補い合ってててというような調和的なところばっかりでもないというのはありますよね。

武田先生，すみません，お待たせしました。

武 田 委 員： どういった範囲のお話をすればいいか。

坂 越 会 長： 広島県内の私学，それから公立，国立合わせていろんな高校ありますけれども，今，県内で育てようとしている卒業生，それに合っているのか，十分なのかどうなのか。

武 田 委 員： 先ほど，川野先生からの話にもありましたように，ここに資料番号，例えば２でございますね，ここの真ん中の部分の星印がついているような人材育成につきましては，少なくとも１つの私学という意味ではなくて，広島県内の私学全て合わせますと，十分人材育成ができているんではないかと思っております。この十分といいますのは，量ではなくて，質という意味での十分という意味です。できていると思います。御存じのように，私立学校は建学の精神に基づく特色教育を推進するというのがミッションでございます。そのミッションはそれぞれの学校違いますけれども，それぞれ特徴を出して，特色を出して教育を推進しております。そういった意味では，広島が今後求める高等学校教育に対しては，十分期待に応えているのではないかと私は思っております。

それから，例えば，これは青木社長がペーパーで出された資料６にございますグローバル人材の育成，ここの中で海外の大学へ直接進学するような学校があってもいいんではないかというようなことに関しましては，ある私学が実際にそれを標榜されて，ことしも３人か４人直接海外の大学に進学をされましたし，ニュージーランドに姉妹校を持っておられて，そちらを通して進学をされるというコースを持っております。ですから，バカロレアのディプロマも取られるようになっている，そういった特色を持っている学校もありますし，別の学校では，東大シフトということを標榜されて，進学に力を入れています。音楽を専門に教育する高校もございます。それから，中山間地域で地域の子どもたちの育成に力を入れておられる学校もあり，そういった様々なものが出てきてるのが私立学校の特色ではないかと。それは，ちょっと繰り返しになりますけれども，十分な期待に応えているものではないかと，このように思っておりますけれども，ただ，御存じのように私立学校は，その学校法人自体が経営をしていかなければならないところがございます。

また青木委員のこのペーパーをお借りいたしますと，水産科を設置したらいいんではないかという，これはアイデアの一つだろうと思うんですが，じゃ，私立学校が島嶼部に水産学科をつくることができるかというと，これは，断言はもちろんできませんけども，大変難しいものがあるんではないかと思っております。そうしたときに，広島県の高等学校教育の中で水産科が必要であるとなった場合，これができるのは，やはり公立高校ではないかと，このように思っております。少し国・公・私立の役割分担の話にも踏み込んでしまうようなところがあるかもしれません。次回のことになるんだろうと思うんですけども，そういった意味で，現在，私立学校が担っている様々な特色教育，そして公立高校，国立高校が行うべき教育，こういったものが相まって，広島県全体の高等学校の教育を推進していくべきではないかと，このように思っております。少し話がちぐはぐになったかもしれませんが，以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。

次は国立附属なんですけれども，なかなか位置づけがむずかしい。ちょっと，いきなり振って申し訳ないんですけど，古賀校長は教育行政の専門家なんで。今，話が出ている，いろんな高校が特徴を打ち出すこと，個性を打ち出すこと，そういう高校の方向性に対して，教育行政，どんなかかわり方があり得るのかなというのは，御見識がありましたら。

古 賀 委 員： 見識はありません。ありませんが，私見を述べます。それは国のレベルの教育行政もそうでしょうし，地方レベルの教育行政もそうでしょうけれども，教育行政というのは，改正教育基本法の前の教育基本法ではっきり書かれてたように条件整備ですから，そういう個々の国立なり私立なり公立なりの学校が，特色ある教育活動を展開するときに，それをやっぱりバックアップするような，財政的なバックアップ，人的なバックアップをやっぱりしっかりしてあげるというのが一番大きな責任だろうとは思います。

ただ，一方では，金は出しても口は出さんというのが，何か美徳のように行政を語る人がいますけども，私は違うと思うんです。やっぱり責任を持って指針を出す。あるいは，進講という言葉もありますけれども，各学校が，私立であれ，国立であれ，公立であれ，各学校の単位で軸を切るときに，いわゆる舵を切るときですけど，間違った方向に切りそうな場合は，やっぱりしっかりと進講しなくちゃならないし，場合によっては指示をしなくちゃならないし，命令もしなくちゃならないということは，やっぱりこれは逡巡してはならんと思います。そういう意味では，やっぱり教育行政というのは重要な柱だろうと思います。この会議で教育行政の方々は，当然，陪席されてるんで直接的な御発言が余りありませんけれども，私は，かなり見識を持ってる方々がそこにおられるので，この会議の中で，やっぱり取捨選択をされながら，知見のあるところをうまくピックアップされれば僕はいいと思ってます。そういう意味で教育行政は非常に重要な役割になっているなと私は思います。これは最初の御質問に関係することです。

２点目ですけれども，これは，今までの議論を含めて，国立大学の附属学校のスタンスということも含めながら，ちょっと私の意見を言わせてください。

まず，最初に１点。私は，まず最初に，疑義があるかもしれませんけど，先ほど会長さんがおっしゃったことと関係して，大阪府，大阪市の教育行政の現在の展開，個人的には支持をしません。非常に私は疑義があります。これは教育行政研究者としてです。もちろん異論があって結構ですけれど。しかしながら，一方，会長さんがおっしゃった言葉の中に，国立大学の附属と私立の高校と，あるいは公立のそれと，予定調和ですみ分け。これは今の世界的な教育改革の動向の中で，果たしてあり得るんでしょうか。あるいは，それは予定調和として，願望としてあってもいいかもしれませんけど，実態論としてあるんでしょうか。先ほど，私立だけではなく，株式会社立の学校もあるような状況ですよ。アメリカにおいてもしかりですけれども，我が国においてもそうです。

私は，大阪市，大阪府の新自由主義に特化した今の教育行政のスタイルは，必ずしも首肯しませんけれども，その世界的な動向は無視しがたいと思います。したがって，広島県においても，公立学校と，私立学校と，国立大学の附属高校と，もちろん，全てイコールとは言いませんけども，かなりの部分で重なるだろうと思います。そして，それは結果的に競合すると思います。競合すべきだと思います。競争することによって質をあげるという今の改革動向は無視できません。

例えば１つ。公立学校でも研発たくさん受けるではないですか，研究開発指定。あれ結局，国が指定して，カリキュラムの開発をさせるわけでしょ。本来であれば国立大学の特権みたいなもんですよ。附属高校の。しかしながら，公立の国立化というふうな言い方で揶揄されることがあるけれども，実際は国立大学の附属の専売特許のようなものなわけです。東大進学の話もありましたけど，私立だけに東大進学をゆだねる必要は，私はないと思います。旧制一中のあの伝統をもう一回復活させてもいいと思うんです。そういう意味では県立中高だってつくったわけですから。私は，そういう意味では，予定調和論はわかるけれども，現実問題としては，それぞれの学校が切磋琢磨をする。公立も国立も私立も切磋琢磨をするというのが，現実的にはやっぱりあるべき姿，私に言わせるとそれが理想的な姿に近いんじゃないのかなと，今の改革動向を見てそう思います。

その中で，先ほど非常に知見がありました。武田先生がおっしゃってる部分です。いかに私立が国立や公立と競合しようとしても，経営の部分で，やっぱりこれは背に腹をかえられない部分がある。そこは身銭を切ってでも，公が，あるいは国立が，あるいは公立が，やるべきことはあると思います。先ほどの水産科なんかの話は，まさにそのとおりだと思います。例えば，国立大学の我々のところで専売特許的にやってることの一つが教育実習です。これ，公立にお願いしてもいいと思うんです。事実，母校実習はあります。しかし，母校実習をメインとするような教育実習が果たして正しいかというと，私は正しいと思いません。やっぱり責任を持って養成機関がやるべきことだと思うんです。そういう意味では，国立大学の附属学校は，公立学校とは違うやっぱり一定の機能があるでしょうし，そこは好む好まざるにかかわらず，できないことですから，ほかが。やるしかない。先ほどの水産科もできないことですからね。仮につくるとすれば公立が，場合によっては国立がつくるしかないと思いますよ。それが社会的なニーズであり，あるいは今，刹那的に子どもたちのニーズがなくったって，社会の発展とか，将来展望を考えたときに，絶対必要だというふうに県の教育行政機関が考えるんだったら，置くべきだと思います。それが私は，国立と公立と私立の，ある意味緩やかなすみ分けである

し，またある意味，はっきりとした競合関係だというふうに理解をします。
以上です。

坂 越 会 長： はい，ありがとうございます。私なりの理解で，本当にこの協議会というのは，今言われたように，県として何が必要かということを提言することが求められてるんだろうと思うんですよ。水産というのが一番わかりやすい例ではありましたけれども，今，カバーし切れてない部分が何なんだというあたりのところが出てくると，次の世代の新しい高校というイメージができやすいというふうには思いますが。
何か行政の話が出た後，申し訳ないですけど，砂原委員さん，すみません。今までの話をお聞きになった上で。

砂 原 委 員： どんなことをお話すればいいか，ちょっと混乱してるんですけども。

坂 越 会 長： ごめんなさい。もう本当に，もう私，自分の関心で。市立高校の在り方，広島市のほうとしては，もちろん今，すごい特徴的なこと，私なんかが目にするのは，小中の英語だとかというものは耳に入ってくるんですけども，高校に関して何かそういう基軸がおありなんでしょうか。

砂 原 委 員： やはり市立の高等学校，基軸とすれば，やっぱり各校の特色だと思うんですね。例えば，普通科の高校がありますけども，でも独立した学科としての特色というのではなくて，普通科という枠組みの中で，それぞれの学校の特色を持たせている。例えば沼田であれば体育という切り口，基町であれば芸術という切り口，舟入であれば国際理解という切り口で。そういう特色をやっぱりきちっと打ち出していくことが，中学生たちにうまく伝わって，高校で頑張ってみようかという。だから特色というのが出ていないと，生き残りという言葉はちょっと厳しい言い方かもしれませんけども，そういった理念を持ってやっていかないと，子どもたちのニーズに応えたものができないんじゃないかなと。
そのとき，例えば市立商業の生徒さんなんかが，市立商業なんかでは，やっぱり卒業したら，いろんな商店とかですぐ働くわけですから，マナーの指導なんかはすごい徹底してるわけですよね。言葉使いであるとか，マナーであるとか，接客の。そういうような市立商業の生徒さんが地元の中学校へ行って，中学生たちにそのマナーのことを指導する。そうすると中学生から見たら，すごいなというふうに，やっぱしそこに魅力を感じますね。
それから，基町の創造表現で言えば，今回の小中高全ての，来年から平和教育のプログラムを全ての生徒に配るんですけども，ことしはモデル校で10校でその平和教育をやる，テキストを使ってやるんですが，そのテキストの表紙のデザインを考えたのは，これは基町の創造表現コースの生徒さんがデザインを書いて，そうすると小中学生はそれを見るわけですね。基町の生徒さんの書いた創造表現。それから，基町に重なりますけども，基町の創造表現のほうでは陶芸教室を，地元の基町の小学生や白島の子どもたちに陶芸というものを，やっぱり一緒にやっていくと。だから，そういった特色があること，そしてそれがうまく地域の中学生や小学生に伝わっていくということが，やっぱりすごく大事なことなんじゃないかなというふうには思います。
以上です。

坂 越 会 長： ありがとうございます。だんだん終盤に近づいてきて市長さんに振ると，何かまとめるようなことをお願いになるんですが，ぜひお願いします。

小 村 委 員： 私が市長になったときに，呉の市立高校をどうするかということが大きな課題の一つでした。以前は女子高校で，総合学科として男子も受け入れることになったのですが，それから10年近くたっても男子はほとんど入らないという状況が続いておりました。私は，市の財政健全化ということを大変重要な課題としておりましたので，場合によっては色々な事業の廃止，あるいは民営化，現に交通局の民営化をいたしました。その中で，呉市がこの学校を持つ意義であるとか，これだけ少子化の時代に数億円の経費をかけて維持をしていくという必要性が大きな検討課題でした。１年ほど見ていて，言葉は不適切かもしれませんが，甲子園に行くか，東大に行くか，目指すものを明確にせよと。そうでないと，この学校の存続そのものを含めて政治決断をしなければいけないときがくるということで現場にはお願いをしました。もちろん教育の中身に政治が入るということは，私は一切しませんけれども。
そういうふうに学校の改革を進めておりますけれども，今どういう状況かといいますと，もちろん野球やその他のクラブ活動も一生懸命やっておりますが，学力も少し伸びてきました。何よりも学校全体にものすごいエネルギーが出てきまして，呉の子どもた

ちの進学希望が高くなってきました。総合学科ですから色々な選択肢はあるものの，芸術とか，スポーツといった特色はないんですけれども，学校全体の，何か雰囲気といいますか，存在感がぐっと出てきて，本当にありがたいことに，市立呉を受検してくれる生徒が非常に増えてきたということがございます。

それで，一つ質問をさせていただきたいのですが，学校の特色，例えば，スポーツの皆実高校とか，書道の熊野高校とか，こういったことは県教委が位置づけをするのでしょうか。というのは，地域からこういうことをしたいという要望があったとしても，校長先生はどんどん転勤していきますよね。そんなに長く一つの学校にいませんでしょう。したがって，この学校はこういう特色を持ってやっていくんだということは，県の方で位置づけをされるのか，質問させていただきます。

また、これは古賀先生と意見が合うと思ったことなのですが，学校が特色を持ったときに，定員割れという問題がどうしても出てきますね。中学生が15歳でもって，国際化とか自分の進路を見定めるということは，実際にはかなり難しいんだろうと思うんです。しかし，特徴ある学校は，社会のニーズがあるんだろうという思いがいたします。

私立の学校は，経営の問題があるから，定員割れしてまでそういうことはできませんよね。したがって，これをやるとしたら，公立の学校が，財政で支えながらやっていく必要があるんじゃないかというふうに思います。経営の方はそれでいいんですけども，問題は生徒にとってのリスクですよね。行ってみたらどうも違うと思って，やっぱり自分は大学へ行きたいというふうになったときに，その学校で拾い切れないというような場合があるのかなと思います。そういう場合に，公立，県立の学校として転校というようなことが，もう少しフレキシブルにできたら，子どもたちも安心して進めるのではないかと，全体のシステムとして，そういうことを検討してみる必要があるんじゃないかと，皆さんの意見を聞きながら思いました。

坂 越 会 長： ありがとうございます。それじゃ，御質問にあった，こういう特色のある高等学校ですね。これは地域先導か，教委先導かといいますか。国際のほうは地域的なといいますか，場所的なことでというのもありましたが，ちょっと御説明いただければと思うんです。

村上教育部長： まず，県の教育委員会が一番大きくかかわりますのが，学校の設置の部分が，まず，そもそも教育委員会の，いろんな手続はございますけれども，大きな役割がございます。そういう関係の中で，学科を設置する場合，これも教育委員会が，基本的には最終的な整理をいたします。それから，先ほどお話が出ております，例えば普通科の中にコースを設けるとか，こういうことも大きくフレームとしてはかかわります。ただ，それを最終的に県の教育委員会として決定するまでの中で，例えばいろんな地域からニーズがあるとか，あるいはいろんな期待感があるとか，そういう地域の声とか要請とかいうことも真摯に受けとめたり，またはそういうところからスタートして，県の教育委員会が受けとめて，じゃ，こういうような学科がそのニーズに対して最もこたえやすいだろうと。あと規模とかも整理しまして，そういうような整理をして，大きなフレームの部分は県の教育委員会がつくります。ただ，実質的な教育内容，教育課程とかいうことは，またルールの中で，それぞれ校長なり，また学校の教職員含めまして，中身づくりという部分については，ベース的には学校に任せるというような形になります。

したがいまして，その大きなフレームや，新しい学校を設けるときの方針とか，あるいは，それに大事なポイントとしてこういう中身を入れることが，今，そこの新しい学科なりコースを設けることの意義ですよというところまでは県の教育委員会として整理をいたします。ただ，それをどのように円滑に具体化し，教育課程として位置づけ，先ほどもありましたように，例えば教育課程の少し周辺にあるいろんな学校の活動とあわせて，魅力ある特色として打ち出していけるかとか，そういう工夫とか運営について，校長なり学校が果たす役割も大きいものがございます。

小 村 委 員： その“地域から”というところで，私が疑問に思ったのは，県立の高等学校の場合，校長先生が何年かおきに替わりますよね。例えば，熊野町で筆の芸術というのは，すぐにイメージできるのですけれども，あるときの校長先生が中心になって，この学校はこんなことをしたいんだと，こんな学科でコースを設けたいんだということが，３年か４年でその校長先生が替わったときに，どうもニーズが違うんじゃないかというようなこともあるんじゃないかという気がしましてね。地域のニーズとか要望というのは，どういう形で整理されてるのかなということをお尋ねします。

村上教育部長： 今の地域の要望とか，あるいは校長が中身的に工夫したいこととかということは，私

どももいろんな形で，チャンネルもありますし，校長からは直接ヒアリングという形で，そういうチャンネルも設けてございます。ただ，今お話しの校長が替わったりするような部分につきましては，大きく今，県立の高等学校は，全て学校としてのミッションとかビジョンとか，その地域の中でどういう役割を将来にわたって果たしていくかということ，これは私どものほうも，特にミッションについてはアドバイスをし，校長としてそれを具体化していくのに，こういうビジョンをやっていきますいうのは，３年間を見通してとか，今年度こういうやり方しますということは，もう早い段階で地域を含めて公にいたします。地域から様々な声を校長もお聞きする中で，じゃ，この３年間の中だけど，それをもっといい形に高めていくのに次の計画をどうつくるとか。ただ，それも全て，今のように学校経営計画とか，あるいは学校の新しい工夫・特色としてということを全てオープンにいろんな形で議論し，私どももそれを受けとめながら，例えばそれを試みてみたときに，成果につながる兆候がありそうだからとか，そういういろんな分析もしながら，また大きくミッション，ビジョンの話に戻しながらとか，そういう往復作業を通じながら，私どもも，次にきちっとコースを組み替えようとかいうようなことになりますと，例えばもっと，卒業する段階でのニーズ，それから入ってくる段階でのそういう要望，そういうことを県の教育委員会としても，校長の立場とは違う形でまた情報を整理したりとか，そういうことのつき合わせをしながら，大きな方向性と，それが実体化していける，そのことをまた地域にきちんと伝えられる，そういう大きな仕組みとして動かしていくというようなやり方をしております。

川 野 委 員：　申し訳ないんですけど，そうしたときに，今，御説明があったときに，もう一つ大事な視点は人材だと思うんですね。教員。どんなにいいフレームをつくっても，そのフレームをうまく活用して生徒を教えてくれる教員がいないと，絵にかいたもちになってしまう。現に，体育で特色を出そうと思ったら，その分野の教員が，そこに何年も，あるいは，もしかしたら任期を超えていなければならなきゃいけないだろうし，芸術も同様やと思うんですね。また，そこに特色を出そうと思えば思うだけ，普通に教員は，今，県の教員採用試験はこの前，発表がありましたけれども，そういう特色を出そうとするのに，その要求をきちっと受けとめられるような教員が採用できているのか。あるいは一芸入試じゃないけども，その分野のたしか採用はある，特別な国体でとか，何かオリンピックとか，そういうのもあったかと思うんですけれども，そういう採用ができているか。この会議の最初のほうに，やっぱり何事も，教員もすごく重要だという御意見もあったと思うんです。私学の場合は，むしろ，そういう採用試験が一括でないので，特色ある人材をぐっと持ってくることができるんだけど，公立学校の場合どのようにその辺は運用されているのかもお尋ねできますでしょうか。

堀野教育次長：　教育次長でございます。

今の一連の御質問の関係から言いますと，例えば皆実高校の体育科の場合には，もう体育科として設置をされていて，重点競技というものも決めておりますので，皆実高校とか神辺旭高校，体育科が設置されているところについては，その重点競技がきちっと教えられる先生を必ず配置するということになります。

一方で，そういうふうに組織的に決まってはいませんが，たまたま，ある学校にバレーの指導にすぐれた先生がいて，大変バレー部を強くしたと。その先生がたまたま人事異動によっていなくなったら，そこのバレー部は弱くなって，この先生が行った先のバレー部は強くなったとか，そういうことがこれまで多々ありました。それは，その特定の学校にバレーの強い人を置くというふうに決めていたわけではないので，そういうことが起きるわけですけれども。

ただ，最近，この一，二年，人事異動の考え方については，余り他の教員と同様に，一律何年いたから異動であるということを余り厳格にやっていくと，そういった部活動の継続性というものが失われますので，ある学校はバレーが強いとすれば，この指導者の次の世代はだれなのかということを我々もリストアップをして，できれば二，三年重ねて，その先生がいなくなってもつながるようにというようなことを，配慮できる範囲で配慮していくという形の支援の仕方になります。したがって，学科・コース，先ほど教育部長が申しましたように，学科・コースという形でかっちりしたものについては，確実に人事的にもフォローがされてますけれども，その偶発的に優れた先生がいて，それが続くかということについては，でき得る範囲で続くように，最近，柔軟性を高めているということでございます。

古 賀 委 員：　学校の特色化を図って，それを維持する，継続するという意味では，今次長さんがお

っしゃったことは非常に卓見だと思いますけども，しかし一方では，先ほどの御意見を，更に私はアグレッシブに補完するようなことを申し上げますと，公教育ですから，そういう意味では，あまねく平準的に，各地域，どこの地域においても最低限の教育水準は保障しなければなりません。これは公教育行政の責務であります。そういう意味では，当然ですけれども，特定の学科をつくってるわけじゃありませんから，そういう先生を全県において広く，あまねく登用して，各地域において貢献していただくことも大いに重要なんですよ。したがって，余り一つの学校にばっかり，エゴ意識で，置いておくこと自体は，果たして正しいのかという問題が１点。

もう一つは，その先生御自身の職能成長という観点から，１つの学校に30年据え置くなんていうばかなことをやったんじゃ，その先生は伸びません。これは洋の東西を問わず，教員の育成という観点からしても，まあ学校種，個人差ありますけれども，７から10年ぐらいで動いていくのが，大体どこの国においても職能成長の観点からすると至当ですよ。したがって，余り特定の人を長きにわたって１つの学校に張りつけるのは，必ずしも好ましいとは言えないということも御承知おきください。ただ，そうは言っても，今の高等学校の，例えば校長さんの任期のように，54歳で初職校長，３年１校経験で２校で定年というふうな，こういう短いスパンは，これはやっぱり改善すべき課題があるというふうに私も思います。

以上です。

坂 越 会 長： 大分，最後になって盛り上がってきたんですけど。

毛 利 委 員： 一言なんですけど，先ほど，皆実高校で連携してということを言ったんですけど，全体を見てて，特色のある学校をつくるのはとてもいいことだと思うんです。そこにすばらしい先生がそれぞれいるということもすばらしいことで。ただ，そういう学校がたくさん広島県に生まれてるな，生まれつつあるんだなというのを感じると，この大きな教育資源というか，県の資源というか，そういうものをもっとみんなで生かして，特に公立高校は，先ほど言われましたように経済的とか，あるいは地理的な要因を取っ払って全ての子どもたちにというところの責務からいうと，そういう先生方の力を生かしていく。学力向上対策事業ですかね，そこで合宿をすると，非常に元気になって帰ってくる。やっぱり他の学校とか，他の学校の先生と出会う機会を，芸術とか，ほかの分野でもつくっていくといいかなと思います。それから，これはちょっとどうなのかわかりませんけども，例えば海外の姉妹校とＷＥＢの講義をやるという話もありますけど，ＩＣＴをもっと利用して，県内の学校同士でそういう教員の講義を聞くとか，子どもたちが，それこそタブレットを持ってそういうことをやるとか，先々の話になるのかもしれませんけど，小さい山間部の学校であっても，いい授業が受けられるとかいうような形で，県内の先生方のいろんな力をもっと生かせるようなことを考えられるといいのかなということを，ちょっと話を聞きながら感じました。

坂 越 会 長： ありがとうございます。そろそろ終わる予定の時間になってきたんですけれども，まだまだお腹の中にお話ししたいことを持っておられる委員……

ああ，はい。

武 田 委 員： 特色教育の話がたくさん出てきておりますので，特色教育を標榜しております私立学校としては，ぜひ，皆様方にお話をさせていただければと思うことが何点かございます。

１つは，古賀先生がお話しになられましたけども，公立学校の国立化ということに関しまして，私どもは，公立学校が私学化してきてるんではないかと，このように思っております。公立学校の使命，種々あるんだろうと思うんですけれども，やはり教育の機会均等，先ほどから公平性というのが出てきておりますけども，こういったものが法律で定められております。公立高等学校の適正配置及び教職員定数の標準等に関する法律という中で，都道府県は，高等学校の教育普及，及び機会均等を図るため，高等学校を設置しなさいというような趣旨のものでございます。そういった中で特色教育を推進をしてくる，これはある意味仕方がないことだろうと思っております。

しかしながら，こういった法律の規定，それから，御存じと思いますけれども，公立学校が中高一貫校を設置してもいいという法律が，たしか平成10年だったと思うんですけれども決定をされた。その附帯決議に，いわゆるエリート校をつくってはいけないということ，それから受験勉強の低年齢化をさせてはいけないと，こういったこと。それから，学力試験を課してはいけないと，こういったものが出てきております。しかしながら現実どうであるかということを考えると，大変これは厳しい，厳しいといいますか，いわゆるエリート校であろうし，受験勉強の低年齢化も招いているし，学力試験であろ

う試験を課しておられるんではないかと，これは私一人が思っているのかもしれませんけども，その辺のことが言えてるんではないかと思っております。しかしながら，先ほども申しましたように，公立学校の特色教育というのは，これはもう否定できないものがあろうかと思います。

そこで，私は，やはり一方で，この特色教育に対する受益者負担というのを求めていかなければいけない，それが必要なんではないかと思ってます。例えば，皆実高校の体育科の話が出まして，重点競技を指定されてるということで，恐らくバスケットですとか，サッカーですとか，陸上競技もでしょうか，そういったものだと思うんですが，そういったところの教員は，私の勘違いならお許しいただきたいんですが，加配ではないかと思います。加配に対する人件費，これはやはり受益者が負担するべきではないかと，このようなことを思うことがございます。

それと同じように，トップリーダーハイスクールというのを県立高校は定めておられますけども，先ほど話のございました学習合宿をする，こういったことに関しても，当然，自分たちの飲み食いや宿泊代は受益者負担でしょうけども，それに係る人件費ですとか，そういったものも，やはり受益者負担にするべきではないかなと，そういったこともやはり考えていかなければいけない問題ではないかと，このようなことを思います。少し議論の論点からは，ずれた話になったかもしれませんけども，私からは以上でございます。

坂 越 会 長： なかなか厳しい御意見が。１点だけ，例えば体育というのは，教員加配になるんですか。

佐藤教職員課長： 加配ではございません。

坂 越 会 長： はい，ありがとうございます。

今日は本当に，後半になって大分盛り上がってきて，ありがとうございます。なかなか，いただいた御意見をまとめることはできないんですけれども，やっぱり今日のキーワードは，学校の特色，個性ですよね。それで魅力のある高等学校，一つ一つの学校が魅力ある学校になっていく，そのためのありよう。実は，今日，こういう題目でお話しいただくときに，自分の頭の中には，軸としては，特定の機能に特化した学校と，もう一方に，基礎・基本というのか，コア，共通に必要な部分という，そういう２つの軸でイメージしてたんですけど，今日お話を伺ってると，必ずしもそうでもないのかなというふうに思えてきました。というのは，学校の特色で，例えば農業，工業というものと普通科という，そういう特色分けというものもあろうかと思うんですが，また違うカテゴリーでいうと，工業高校の中でも，当然大学進学をしたい子どもたちもたくさんいるわけで，そこの部分で共通の部分というのは当然担保してやらなきゃいけないという。その上で一つの特色。川野委員さんがすごく現実的なことをおっしゃってくださったんですけども，途中でもう一回やり直しがきくよと。この部分は基礎・基本，コアの部分はみんな共通してしっかりやってて，ピーク制というのか，コース制というのか，ここの部分で，上で乗っけて特徴を打ち出すというような，そういう学校も当然あっていいのかなというふうに，その特色，機能強化という部分のレベルですよね。学校全体でそうやっていくこと，それからある部分を担保しながら，更にその上を打ち出していくこと，そんなようなちょっとイメージを持ちました。

それから，これは，いただいた御意見の中で，私の頭の中に残ったことなんですけれども，やっぱり私立，公私を含めると，なかなか難しいところがあるんかもしれませんけど，少なくとも公立学校の間での連携ですよね。生徒の流動性というお話も伺いました。なかなか，入試やってて，定員があって難しいところはあろうとは思うんですけれども，先ほどの，ここやってたけれども，でもこんなこともやってみたいなという子どもが，本当に真剣に思ったときに移れるような仕組み。あるいは連携校というか，ある学校，昔の区割りじゃないですけど，それとは違いますけれども，緩やかな学校連携を組んで，うちはこれができます，うちはこれができます。教員も互いにやりとりしながら，いい授業だったり，いい指導を共有できるような仕組み，そんなこともその地区のブロックの中で考えていく必要性はあるのかなというふうな，アイデアというか，お考えとして印象に残りました。

それから，最後ですけれども，やはり県教委がかかわる高等学校教育のありよう，私学であったり，国立もそうなんですけれども，県内の高校生にきちんとした高度の普通教育なり専門教育を提供するための役割を担うこと。あわせて，そういう中で，なかなか，私学だったりするのがカバーし切れないようなものについて，公立学校，県立とし

て手当てすること。芦品まなび学園なんていうのも，やっぱりこれ，きちんと県というか，公立学校としてやらなきゃいけない部分ですよね。一方で，国際科，バカロレアというような，あれも県内１校やっとられましたけれども，附属学校でもああいう，ハーバード大学に行くような高等学校コースができないかと，今考えてるんですが，すっごい大変です。認可を受けるだけでも経費がかかります。まして，それで各教科を英語で授業をしようとすると，とんでもない人と予算がかかります。そういうものっていうのは，私学がその売りとして――言葉がちょっと露骨ですが，売りとして，採算が立つんなら，それはそれでもいいですけれども，多分難しかろうというふうにも思いますよね。そういう部分というのが，県の行政というのが支援できるような領域。

県内の高校が，本当にそれぞれ一生懸命アピールしていただいて，今日も見せていただきましたけれども，特色ある教育をやっておられるということ，それは本当にそのとおりだと思うんですが，更に，これを踏まえて，私たちが今まで話してきたような，あるべき人材像，あるいはあるべき高等学校教育というのを実現する，その構図ですよね。それをまた次回からお話しいただけたらというふうに思います。

最初にも申し上げましたけれども，第６回が中間まとめになりますので，第１回から，今日，第４回までの協議のまとめを事務局のほうにお願いしておきます。そして，次回，５回目の協議会で，それについての整理・確認というふうにしたいと思います。

ちょうど時間になりましたので，これをもちまして４回目の広島県における今後の高等学校教育の在り方を検討する協議会，終了したいと思います。ありがとうございました。

それでは，事務局のほうに。

馬屋原課長代理：　はい，失礼いたします。長時間にわたりまして熱心な御協議をいただき，ありがとうございました。

次回，第５回の協議会の日程は，10月15日の午後からとさせていただき，協議内容は本日と同じ「本県における今後の高等学校の在り方」を大テーマに，「国・公・私立高等学校の役割」について御協議いただく予定としております。どうぞよろしくお願いいたします。

事務局から以上でございます。本日はありがとうございました。

（17：01）